

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.17

編集) 1988・3・25
発行 佐賀県立九州陶磁文化館
代表者 久間 三郎
〒844 佐賀県西松浦郡有
田町中部乙3100-1
電話 0955-43-3681
印刷所 三光印刷株式会社
佐賀県伊万里市新天町
287-3



色絵花鳥文六角壺（一対） 館蔵資料

佐賀・有田・南川原山・柿右衛門様式
17世紀後半
口径13.0cm、総高33.1cm、底径13.2cm

赤や緑、青の上絵具で華やかな花卉文、花鳥文を描くこの六角壺は、肥前磁器がヨーロッパに輸出された1680～90年代の代表的な製品である。柔らかな白い素地、あざやかな上絵付は、洗練された様式美、高い技術水準を感じさせる。ドイツ・マイセン窯でこの製品のコピーが作られており、このような日本磁器はヨーロッパ人の熱愛と羨望の的であったろう。

特別企画展のお知らせ

「長崎の陶磁」

佐賀県立九州陶磁文化館は九州各地域に順次スポットをあてた展覧会を開き、「九州のやきものシリーズ」として九州のやきものの歴史とその特質を紹介してまいります。

初年度の今回は「長崎県の陶磁」を取りあげます。

長崎県は佐賀県とともに肥前陶磁の産地として古い歴史をもっています。佐世保市にある葎の元窯・柳の元窯・牛石窯などの陶器は平戸系古唐津として著名です。

三川内焼や波佐見焼は磁器創業期からの歴史をもち今日に至るまで長崎県の二大窯業地として栄えています。三川内焼の唐子絵・彫刻もの・薄手もの、波佐見焼の青磁・くわんか茶碗・コンブラ瓶などは代表的な作品です。さらに、「西の仁清」とうたわれきめ細かな素地に美しい刷毛目をあらわした現川焼、また文人画を染付であらわした亀山焼、中国の素三彩をうつしたり磁器に漆をまきつけた長与焼、あるいは朝鮮半島の高麗茶碗をうつした対州焼、そのほか鵬ヶ崎焼、秋の浦焼など様々な作品が知られています。

この展覧会はこれらの「長崎の陶磁」の名品のかずかずを一堂に展示してそれぞれの歴史と特質を紹介するものです。

○会期

昭和63年10月22日(土)～11月27日(日) 32日間

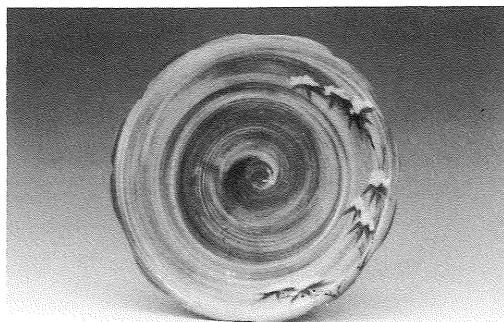
休館日：10月24日、31日、11月7日、14日、21日の月曜日

○展示構成

三川内焼30点、波佐見焼30点、現川焼30点、亀山焼20点、対州焼10点、長与焼5点、鵬ヶ崎焼5点、その他長崎各地の陶磁20点、出品総数 150点。



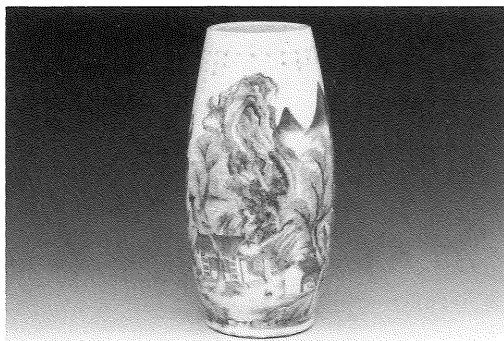
青磁芭蕉文三脚付鉢 波佐見焼・三股山 17世紀中頃



刷毛地雪持笹図輪花鉢 現川焼 1691～1749



三彩漆塗八方割詩文入大皿 長与焼
18世紀末～19世紀初



染付山水樓閣詩文花瓶 亀山焼 1804～1865

◀ 染付唐子図茶碗 三川内焼 19世紀前半

〈行事報告〉

陶芸教室第11期・第12期

今年度の陶芸教室は、第11期が昭和62年6月27日から9月5日まで、第12期が9月12日から11月14日までの日程で終了しました。前期を大宅利秋先生、後期を石橋国男先生に指導していただきました。受講生は20代から70代まで幅広く、また唐津市や佐賀市など遠いところからの参加も多くありました。みなさん作陶の経験のない方々で、初めてのロクロや紐づくりが非常に楽しかったようです。修了者はOB会をつくり、閉講後も自主的に活動されています。



大宅先生による講評（第11期）



出来上がった作品（第11期）

青少年科学活動

促進事業 — 焼物教室

佐賀県教育委員会では、青少年の科学に関する興味や関心を、社会教育の特色を生かしながら育む事業と

して、様々な科学教室を開催しております。その中の一つが当館で開かれている焼物教室です。有田の小学校の児童生徒19名が参加しました。昨年の12月12日から今年の1月10日まで、8回にわたり焼物の特色や科学や歴史を学び、また自ら作品をつくりました。子供たちは、軟らかな粘土が硬い光沢のある焼物に変化してゆく過程に驚いていました。



茶碗作りに挑戦



くりぬきの技法

特別企画展

「伊万里・古九谷名品展」

昭和62年度の特別企画展「伊万里・古九谷名品」展は、10月1日から25日まで石川県立美術館、11月1日から12月6日まで当館において開催されました。当館にとっては初めての共同企画でしたが、石川県立美術館のご協力で、充実した内容となりました。古九谷の名品が九州で69点も並んだのは、恐らく初めてのことでしょう。さらに伊万里と古九谷の古窯跡出土品や古

文書も出品され、研究者にとっても意義深い展示だったようです。同様に東京大学構内の大聖寺藩江戸上屋敷跡出土品も話題をよびました。



館長による開会式挨拶



第2展示室古九谷コーナー

マイセン冠火食鳥噴水完成

白磁冠火食鳥置物と噴水台座は、マイセン市と有田町の姉妹都市友好を記念して、ドイツ民主共和国から贈られました。火食鳥とは体長1.5 mぐらいの大型の鳥で、ニューギニアやオーストラリアに住んでいます。この白磁の作品は、1731年にマイセンの名工ヨハン・ヨアヒム・ケンドラーが原型を作り、それにもとづいて1985年に複製されたものです。昭和61年に白磁の火食鳥が到着し、62年に噴水台座が送られてきました。そして当館の内庭に設置されることとなり、11月1日に除幕式が行われました。赤い御影石の芯柱から四方に水が落ちる仕掛けになっています。この噴水の設置でマイセンの鐘に続いて新しい見所が1つ増えました。



除幕式

有田国際ファインセラミックス・シンポジウム

最近新素材として各方面から注目を浴びているのがファインセラミックスです。この最先端の分野に関わる世界各国の研究者を集め、様々な問題について討議するこのシンポジウムは、今年度で2回目をむかえました。11月17日、18日の両日に、当館の講堂において多数の発表がなされました。国外からはニルス・クラウセン氏（西ドイツ・ハンブルグ工科大学）やマルセル・ファンデボルト氏（オランダ・デルフト工科大学）の他、スウェーデンや韓国からの参加がありました。

有エデザイン科卒業制作展

佐賀県立有田工業高等学校のデザイン科卒業制作展が、1月21日から24日まで当館で初めて開かれました。それ以前には別の場所で開かれてきたため、通算では



展示室風景



ぬいぐるみのデザイン

19回目になります。出品作品には、木工、染色、陶芸、紙、グラフィックなど多岐にわたり、見る者を楽しませてくれました。有工のデザイン科は毎年県展などで上位入選をはたし、今回もポスターや染織などにそうした優秀作がみられました。陶芸の作品は、専門の窯業科があるため、数は多くありませんが、皿の文様デザインや練込みの作品にはデザイン科らしさがよく表われていました。

西松浦郡小中学校 児童・生徒作品展

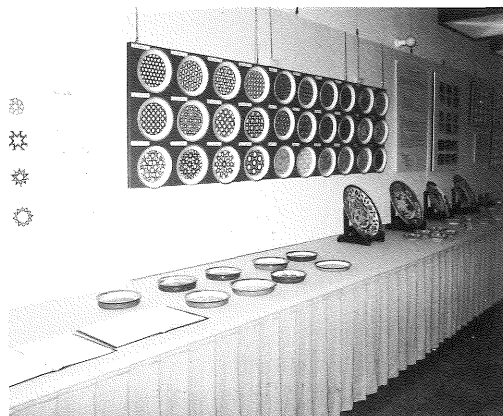
昭和63年1月30日から2月14日まで、第6回西松浦郡小中学校児童生徒作品展が開かれました。陶芸作品の他、彫刻、木工芸、絵画など様々な分野の作品が含まれています。小学校一年生ののびのびした造形や、中学生による大人顔まけの陶芸作品などは、見る人を楽しませてくれました。会期も当初は1週間でしたが、昨年から2週間に延長され、児童生徒や父兄の観覧が大幅にふえました。



展示室風景

有田窯業大学校卒業制作展

3月1日から6日まで、佐賀県立有田窯業大学校卒業制作展が開かれました。今年で第2回目になります。昨年より出品点数が増えたため、ロクロと絵付けの短期研修生作品は、カフェテラスに仮設展示場をもうけて展示されました。第1展示室には陶磁器科25名と研究科7名の作品が展示されました。昨年の第1回展に比べると、今年はより一層充実した内容となりました。制作意図がパネルで明示され、観覧者にとってもわかりやすい展示ができたようです。また今年から作者全員の写真とメッセージが添えられ、展示が親しみやすいものとなりました。陶磁器科の太田直子さん、研究科の小橋隆之さん、ロクロ研修生の志水博行さん、絵付け研修生の野口百合子さんらに優秀賞が贈られました。



展示室風景（第1展示室）



展示室風景（カフェテラス）

〈速報〉

有田町年木谷1号窯跡の調査

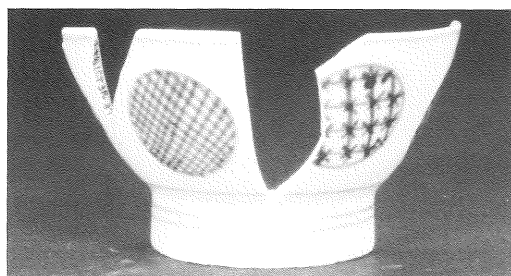
当館は、国庫補助事業「肥前地区古窯跡詳細分布調査」の昭和62年度調査として、年木谷1号窯跡の発掘を12月14日から21日にかけて実施した。年木谷1号窯跡は西松浦郡有田町泉山の年木谷の最奥部にある。谷の入口西側に年木谷3号窯があり、その背後に宝暦2年（1752）「奉寄進上泉山登釜焼中」の石碑がある。窯跡の状態などから、3号窯が『皿山代官旧記』1766年以降の「泉山本登」のことと推測される。ところが、同書安永7年（1778）に泉山釜焼達が願い出て、新たに「泉山新登」を築いたとある。泉山新登は同書文化11年（1814）に室数15室とあり、さらに1818年までその存在を追えるが、後の1859年の『松浦郡有田郷図』には3号窯（泉山本登）だけが描かれている。中島浩氣『肥前陶磁史考』（昭11）に「安永年間泉山年木谷に、新登を築造して窯の不足を補充することと成り、宗伝が宗家深海市郎此経営の任に当った。之が泉新登又は年木谷窯と称せらるるもの」とある。江戸後期の比較的短い期間操業したとみられる泉山新登が、年木谷1号窯ではないかとの推測のもとに調査が行われた。

その結果、窯の焼成室1室の奥壁と次室の火床を検出した。焼成室の幅は約5.5m、砂床と次室の火床の比高差は45cmである。窯幅が狭いことや、比高差が低いことから、検出された焼成室は窯の下部であろうと思われる。

砂床奥壁際からハマが多数出土し、一緒に少量の陶片が出土した。この陶片の内容や、1859年の絵図には見られないことから、19世紀中ごろに廃窯になった可能性が強い。

この窯の砂床下にもう1枚の砂床と、それに伴う奥壁が発見された。よってこの窯は1度大きな改築が行われたと思われる。窯の東外側の調査で作業面が検出され、窯壁の外側の腰部には石組をめぐらして補強していたことが明らかとなった。また作業面は新旧2枚あり、やはり1度大きな整地が行われたことを物語っている。

窯の左（西）側に残る物原の調査は、現地表下1.4mまで掘り下げたが、壁面が崩壊する危険があったため調査を中止した。出土品は染付が主で、次に白磁で



1. 染付丸文広東形碗



2. 染付窓絵文端反碗



3. 染付葉盒「肥前 烏犀圓」

あり、銹釉やルリ釉が少量ある。器種は碗が主で、皿や鉢、蓋物、紅皿、戸車などが少量みられる。碗は蓋付碗で端反形のものが主で、他に広東形などがある。広東形碗は1780年代ごろから流行し、端反形碗は1820年代以降流行した飯碗と推測しており、文様の特色を考え合えると、出土品の年代は1780年代から19世紀中ごろとみられる。

「肥前、烏犀圓」と染付した葉盒が1点出土したが、これは佐賀市の野中烏犀圓本舗の特注品であろうか。1号窯の南約100mに烏犀圓の注文品専用の窯があったが、昭和42年の水害で流失したという。

年木谷1号窯は深海宗伝系統に関わる窯として重要であるばかりでなく、操業年代が比較的短く限られた窯のため、製品や窯構造の変遷研究の上で貴重な資料と言える。（大橋康二）

シリーズ

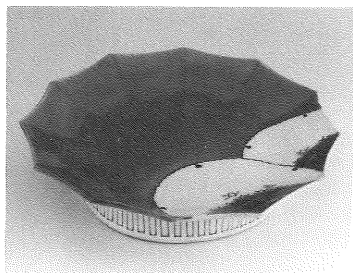
やきものにみる文様 (14)

雪輪文様

雪の結晶は一つの中心から六方に対称的に発達した平面的な形をもっていることが多い。雪輪は雪の結晶を図案化したもので、多弁の菊花形の周囲六方に小さな丸い切り込みをいれたもの。土井利位は雪の結晶の観察を続け1833年に『雪華図譜』をあらわし、86個の結晶図を紹介しているという。しかし雪輪文は既に桃山時代の小袖に見られるという。彦根屏風における犬を連れた婦人、松浦屏風における髪を梳らせる婦人の衣裳に雪輪が描かれている。これらの屏風は寛永年間(1624-43)の作と考えられている。小袖模様の見本帳にも多く紹介され、古い例では『御ひいなかた上下』(寛文7年・1667)にあり、元禄13年(1700)の『当流七宝常盤ひいなかた』の百三十番の雪柴かきに梅は、雪輪の中に柴垣を配し、それは写真に示す「染付雪輪柴垣文皿」(口径15.3cm・17世紀後半・有田皿山・館蔵品)の図柄と非常によく似ている。雪輪の周囲の切り込みは六方に限らず、やきものではむしろ不定数の切り込みをいれた雪輪を描いたもののほうが多い。鍋島の作品には「染付菊水仙雪輪文皿」や「青磁染付雪輪文皿」がある。前者は一尺の大皿。雪輪を二つずらせて重ねて描き、その中にそれぞれ菊と水仙を描く。後者は青磁釉を背景に12個の雪輪を染付でちりばめた七寸皿。ともに18世紀初め頃の作品である。有田・南川原山の作品で「延宝年製」(延宝は1673~80)の染付銘を高台内に記した作品が紹介されている(『藍九谷と藍柿右衛門』山下朔郎著)。

1670~90年代に有田で型を用いて成形した雪輪形の三脚付白磁皿も伝わっている。そのほか長崎の亀山焼で丁寧に雪輪を描いた水指や、波佐見焼で乱雑に雪輪を描き散らしたくらわんか茶碗が知られている。

(吉永陽三)



染付雪輪芝垣文皿
有田皿山
17世紀後半
館蔵

シリーズ

やきものの技法 (14)

化粧掛け

成形した素地の表面を別の土で美しく装うこと。ほとんどが白い土を用いるので、白化粧ともよばれる。フランス語のengobier(泥漿を掛ける)により、我国で「エンゴーベ」と称されることがある。化粧掛けは、白土を水に溶かして「掛ける」のであるが、泥漿の中に「浸す」方法もある。また刷毛で白い泥漿を「塗る」方法もある。いずれの場合も白化粧がなされることには変わりはないが、「塗る」場合は刷毛目が残る、それ自体が文様として特色をもつので、「化粧掛け」とは呼ばずに「刷毛目」と呼んでいる。したがって化粧掛けという技法は、泥漿を掛けるか浸すことによって素地を装うことと解せられる。

化粧掛けは、素地が黒っぽいものや肌が美しくないものをカバーするために行なわれる。表面に白い土の層をつくることによって、素地は白く滑らかになり、またその上に文様を描くにしても色がきれに見える。



色絵菊唐草文碗 琉球・壺屋窯
19世紀前半 館蔵

こうした化粧掛けの技法は古くからあり、たとえば、中国においては、唐代の三彩、宋代の磁州窯の製品等によく見られる。磁州窯の場合は、化粧掛けされたものの上に文様を描くほか、文様の部分だけ表面の化粧土を掻き落とし、素地そのものの灰地を文様として表出させている。朝鮮では化粧土を用いた装飾は多く、象嵌や刷毛目とともに、化粧掛けによる「粉引き(粉吹き)」の茶碗が名品として残されている。粉引きの場合は、泥漿に浸す方の化粧掛けである。日本では九州各地の陶器窯でみられる他、美濃の織部や京都の乾山にもみとめられる。乾山は化粧土を絵具として用いたところに特色がある。写真の碗は白化粧後透明釉をかけて本焼きし、さらに上絵付けをしている。(鈴木由紀夫)

陶磁資料寄贈者芳名(敬称略)

〔昭和62年4月1日～63年2月29日〕

九州陶磁文化館に資料をご寄贈いただきましてありがとうございました。ご寄贈いただきました資料は、永く保存すると共に、研究・展示等に供したいと存じます。今後とも、ご協力をお願い申し上げます。

またご寄贈いただきました資料は、新収蔵品展(63.9.6～9.18)および佐賀高取家コレクション展(63.5.24～6.5)に展示し、広く県民の皆様にご高覧いただく予定です。

熊沢正幸 東京都 染付輪繫文角皿

小橋一郎 埼玉県 染付柏葉形小皿、白磁陽刻鳳凰文皿、色絵几帳文皿、染付山水文角皿

江口 茂 神奈川県 染付菊梶葉文コーヒー碗

高取 綾 佐賀県 染付花鳥文大海茶入ほか、131点

谷 善一 長崎県 染付竹雀文碗

前山 博 佐賀県 銅版染付紅葉文皿

神通 豊 東京都 染付松竹梅文大皿

北島常一 佐賀県 染付萩文皿、色絵松竹文変形皿、青磁陽刻菊文蓋物

笹倉一男 福岡県 須恵器横瓶、染付鶉図皿

中島政利 佐賀県 陸軍食器



いろえ きちょうもん 皿

鍋島藩窯 江戸末期(19世紀中葉)
小橋氏贈



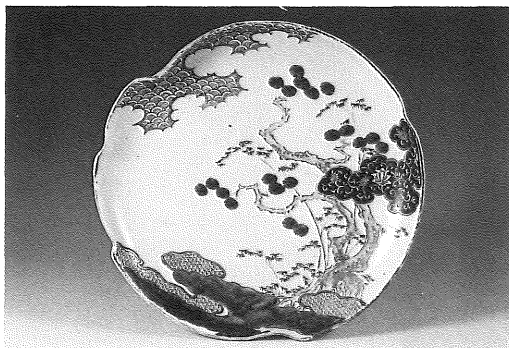
ぞめつけ なりにすめもん わん

染付竹雀文碗 有田皿山 天保10年(1839)
谷氏贈



ぞめつけしうちくばいもん おおざら

染付松竹梅文大皿 有田皿山 江戸前期
(17世紀後半) 神通氏贈



いろえ まつたけもん へんけいざら

色絵松竹文変形皿 有田皿山 江戸中期
(18世紀前半) 北島氏贈

利用案内

開館 午前9時～午後4時30分 月曜休館 年末年始(12月28日～1月4日)休館
観覧料 4月1日から下記の料金になります。
一般200円(150円)／大学・高校生150円(100円)／中・小学生70円(50円)／
()内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。
交通 佐世保線有田駅下車徒歩15分